

が満たされて初めて人間の心は命に満たされ、それが外に溢れ出さずにはいられないのだと洞察している。この超越と人間が接し交わる場とは、人間が命に与り生かされている根源、誰によっても侵しえない人間の尊厳が由来するところを指し示しているといえよう。

内村鑑三とA・J・ヘシエル

——楕円の一神教思想について——

手島 勲 矢

個人的には交わることがなかった日本とユダヤの二人の思想家、すなわちキリスト者内村鑑三（一八六一—一九三〇年）とユダヤ教徒A・J・ヘシエル（A. J. Heschel 一九〇七—一九七二年）は、奇妙なことに「楕円」というキーワードを共有して、きわめて似通った——それでいて、それぞれの個性が際立つ——思想を展開している。当該発表は、その両者の本格的な比較研究に向けての、準備的、初学的考察を述べるにとどまるものであるが、内村とヘシエルの比較研究は、ある意味、従来、閉じられた文脈の中で行われてきたユダヤ思想の特殊性と普遍性についての議論に外部より新しい光を当てるものになると考える。

内村鑑三が一九二九年十月に『聖書之研究』誌上で発表した短文「楕円形の話」は、「真理は円形に非ず楕円形である。一個の中心の周囲に画かるべき者に非ずして、二個の中心の周囲

に画かるべき者である」という言葉に始まり、「地球其他の惑星の軌道は楕円形である、宇宙は楕円体であるといふ。真理も亦二元的であつて円満に解決し得る者ではない。艱難の坩堝の内に焼尽す火に鍛えられて初めて実得しうる者である」と論を結ぶ、極めて挑戦的な文章である。

この内村の文章の思想は、アブラハム・ヘシエルの名著『人間を探し求める神』（一九五五年）の一節「楕円思考（Elliptic Thinking）」の議論に驚くほどに酷似している。「Philosophy of Religion is involved in a polarity: like an ellipse it revolves around two foci: philosophy and religion. Except for two points on the curve that stand in equal distance to both foci, the more closely its thought comes to one, the more distant it is from the other. The failure to sense the profound tension of philosophical and religious categories has been the cause of much confusion. This unique situation of being exposed to two different powers, to two competing sources of understanding, is one that must not be abandoned. It is precisely that tension, that elliptic thinking which is a source of enrichment to both philosophy and religion.」

発表者は、両者の述べる「楕円」思想は根本的に「円」思想の一種ではありえないという理解を、「一、二中心点を保持する、二、論理的な一元化の試みを否定あるいは求めない、という前提を立てる両者の議論の姿勢において認め、その点において、いわゆる数学や宇宙物理学における科学的な「楕円」概念

第4部会

とは異なる立場の、宗教的な、思想であると考える。さらには、その特異な思想の一致の背景として、西欧近代化の波にさらされた東欧の宗教的ユダヤ人の苦悩（近代化とハンディズム）と、封建制度から近代国家への脱却を余儀なくされた日本人の精神的な混乱、心理的・社会的な精神分裂の状況との共通性を指摘し、加えて、最後に、西欧的な哲学・科学の弁証法に対する究極のアンチテーゼの論理形式としての「楕円の一神教思想」の可能性を示唆することで、本格的な内村とヘシエルの比較研究の輪郭を描く努力の入り口とする。

回心の比較宗教

—— 廻心とタウバ ——

徳田 幸雄

本発表は、「回心」あるいは「コンバージョン」の辞書的な意味によって媒介される二つの概念、仏教における「廻心」とイスラームの「タウバ」とを比較し、そこに意味上の重なり他に、構造的な共通性を指摘する試みである。まず、それぞれの概念がどのように用いられているかを概観したうえで、問題の共通構造を指摘し、考察を加えたい。

一般に仏教の「廻心」には、罪惡に背を向ける「廻心懺悔の廻心」、大乘へと方向転換する「廻心向大の廻心」、そして徹底した自力の否定を要とする「捨自帰他の廻心」の三つの意味がある。ここでは、親鸞を起点とする「捨自帰他の廻心」に着目

したい（以下、「廻心」と略す）。そこにおいて、斥けられるべきものとして強調されているのは、「罪惡」でも「小乗」でもなく、他ならぬ「自力」である。したがって「廻心」は、己の力によって達せられるのではなく、むしろ己の力を放棄して他力に己を委ねることによって実現されるのである。では、この「廻心」において、自力と他力はいかに結びつくのであろうか。この問題を、金子大栄や星野元豊は、「廻心」と「回向」との関係に置き換えて考察している。それによれば、人間の「廻心」がすなわち他力の「回向」に他ならず、両者は逆説的に一致するという。こうした「廻心」に潜む自力と他力との逆説的関係は、禪を背景とする鈴木大拙や西田幾多郎の廻心把握にも認められる。これらを踏まえれば、「廻心」とは、自力の否定と他力の回向とが逆説的に結びつくことで達せられる自己の転換といえよう。

一方でアラビア語の「タウバ」は、「戻る」がその原義とされ、一般に「悔い改める」あるいは「悔悟」「改悛」などと訳される。またこの「タウバ」は、しばしばスーフィズムにおける神秘階梯の最初に位置づけられ、ある方向転換を意味する点でキリスト教の「コンバージョン」に相当する語と見なされてきた。ここでは、さしあたりクルアーンにおいて、この語がどのように用いられているかを概観したい。特筆すべきは、全八七箇所のうち三七箇所、神がこの語の主語となっているという点である。つまりクルアーンにおいては、人の「悔い改め」と神の「赦し」とが「タウバ」というたった一つの語で表現されているのである。このことにこの語の原義を考慮すれ